

## 2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	肥田 幸子
最終学歴	学 位	専門分野
金城学院大学大学院人間生活学研究科（修士課程） 人間発達学専攻修了	修士 (人間発達学)	臨床心理学

### I 教育活動

#### ○目標・計画

##### (目標)

本学の建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」で掲げられているように責任感があり、社会の要請に応えられる心身ともに豊かな学生を養成することを目標とする。

また、コンセプトフレーズの「オンリーワンを一人にひとつ」はまさに小生の教育理念である「誰でもがもっているそれぞれの輝きを大切にすると合致する。臨床心理学の中でも発達障害支援という領域を研究し、真に他者の命や心に思いをはせることが出来る人間を育てる教育を目指している。実際の教育活動でカウンセリングや心理知識を指導する場合においてもこの基本の上に先達たちの知識と学問を構成していきたい。

もう1点、できるだけ学生参加型の授業形態にしたいと考えている。多人数クラスが多いためにほとんどが一方的な講義形式にならざるを得ない。これをどのようにして双方向性のある授業にし、それぞれの学生の良さが伸びていくような授業にするかが課題である。私語を押さえながらも自由な発言が飛び交い、学生の着想がどんどん表現され、それを整理していくのが教員の役目というような授業が目標である。

##### (計画)

「人間と心理」が「心理学概論」という科目名に変更になった。もともと人間と心理においても概論的な授業内容であったが、より心理学全体を概観し、興味深い心理の世界を紹介したい。本科目は東邦高校生を受け入れている科目でもあり、高校生にも興味を持たせ、なおかつ質の高いものに仕上げたい。カウンセリング基礎演習・演習では模擬カウンセリングを実施し、学生が相互に意見を述べ合える授業にする。この授業においては目標に掲げた「真に他者の命や心に思いをはせる」授業を可能にすることができる。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、グループワーク、構成的エンカウンター、サイコドラマ等体験的学習を中心に学生が対人スキルを向上し、他者理解・自己理解を深める。この授業は目標に掲げた学生参加の体験型学習になる。教育相談では基礎知識に加え、今の教育現場の現状を伝える。これを行うことで、教員志望の学生がより教育現場に対し興味を持てるようにする。専門演習Ⅰ・Ⅱでは、卒業論文を書くという目標のもとに文章力、思考力、プレゼンテーション力を総合的に養う。今回からコースとしての演習形態になったので、他のグループとバランスを取りながら個人のとグループの力が伸びるように配慮したい。

#### ○担当科目（前期・後期）

（前期）心理学概論、人間と心理、教育相談、カウンセリング基礎演習、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ

（後期）カウンセリング概論、カウンセリング演習、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、

#### ○教育方法の実践

「心理学概論」は公認心理師の指定科目にも含まれ、より範囲が多様になり専門性を深める必要

性が出てきた。また、それを大学生だけでなく、解放している東邦高校生にも興味をもって取り組んでもらえる内容にする必要があった。学習内容は分かりやすく、なおかつ心理の奥深い世界を楽しめるものになったと考える。

カウンセリング基礎演習・演習では学生の模擬カウンセリングを録画し、逐語録を作成してカウンセリング方法の検討を行った。自分たちのカウンセリング映像を見ながらの検討というのは独自の方法であるといえる。この授業においては目標に掲げた「真に他者の命や心に思いをはせる」授業が実施できた。

総合演習Ⅰ・Ⅱでは、構成的グループエンカウンター他を用い、自己理解、他者理解が深まるように体験的学習を行った。総合演習Ⅱのフィールドワークでは、名東福祉センターを利用する高齢者との交流を行った。

専門演習Ⅰ・Ⅱではグループで卒業論文・ゼミ論文を作成した。2 グループの発表を行ったが、統計的検定も加味したレベルの高いものになった。

心理学概論、教育相談、カウンセリング概論は人数クラスであるため講義形式となりグループワーク等の体験的学習は難しい。しかし、できるだけ相互学習が行えるようにクイズ形式や2人組ワークが行えるよう工夫した。

#### ○作成した教科書・教材

心理学概論、教育相談、カウンセリング概論、ではパワーポイント用スライドを各科目、約150枚を作成。カウンセリング基礎演習、カウンセリング演習では模擬カウンセリングの収録DVDを13枚、各逐語録、箱庭シートを作成。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、グループワークのためのワークシート、カード、振り返り用シート等を各時間分作成した。

#### ○自己評価

学生アンケートによる授業評価では、前期の教育相談4.2、カウンセリング基礎演習4.4、心理学概論4.3（全科目平均4.9）、後期のカウンセリング概論4.2、カウンセリング演習は平均4.6（全科目平均3.9）であり、概ね目的とした授業効果が発揮されたものと考えている。

目標に掲げていた学生参加型の学習はやはり人数クラスでは難しく、カウンセリング基礎演習、演習の授業では大いにその効果を発揮した。

基礎演習では、大学に馴染んでもらうことが大事であり、ドロップアウトしそうな学生もなんとか皆の中にとけ込めるように配慮した。

専門演習のⅠ、Ⅱ、では、論文作成についての準備と制作をみっちり行うことができた。プレゼンテーションも期待以上の出来であり、もう少し負荷を多くしてもよかったのではないかと考える。

## Ⅱ 研究活動

### ○研究課題

#### 1. 発達障害傾向をもつ学生の就業支援の研究

本研究も基礎研究の段階から実践研究の段階へと移行してきた。平成25年度から29年度まで科学研究費の補助を得て「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する診断によらない支援研究」が始まった。発達障害傾向の学生のピックアップのための尺度研究やその妥当性、信頼性の研究については、学会発表、学会誌等多くの発表の機会を得た。2018年度はそれに続く就業に関する支援研究を主に行った。就業困難な若者の問題に対し、教育機関において果たすべき課題は多い。発達障害傾向の若者に対する就業支援は国からの予算も付き、就労移行支援所など社会的には多くの支援事業が活動をするようになっている。しかし、彼らが大学に在学している間は多くの支援か

ら遠ざけられる。それは大学生というのは学問することを主に考えなければならない時期であり、大学の存在意義にも関わる問題である。また心理的に、彼らや彼らの保証人たちは大学に入学できたことで将来の就労が約束されているように感じてしまうことも考えられる。大学に入学できる学力と将来社会で仕事をしていける力は必ずしも比例していない。ゆえに将来の就業に困難をきたすであろう学生を早い時点でスクリーニングし、社会適応が少しでも容易になるように訓練及び教育をすることがこの研究の課題である。具体的には、若者ハローワークや就労移行支援所等との連携を行いそれら学生の在学中の就労体験を行う。彼らは個々にもてる能力の強弱に極端な差を有するため、周りからの適切な支援無しでは社会適応が難しい。この研究は本当にオンリーワンが輝くための研究である。

## 2. 小中高等学校生徒を対象としたメンタルヘルス維持と不適応防止の研究

不登校つまり学校不適応の状態が、不適応兆候、不登校傾向、スクールカウンセラーへの関心とプロセスを追って展開すると仮定した研究は平成 26 年度から多くの学会発表を重ねてきた。昨年はそれを『心理臨床学研究』に発表することができた。今後は小学校の不適応研究の中でもスクールカウンセラーとの関係を質的・量的両方の手法で分析したものを視覚的に分かりやすい形で提供できる研究を続けたい。

### ○目標・計画

#### (目標)

1. 「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援研究」に関する論文を発表すること。現在日本キャリアカウンセリング学会で査読中である。

また、実践活動として、多くの支援団体とも現在のネットワークを広げて、要支援学生の役に立つこと、またそのシステムを私以外のどの先生でも使用することができる構造化を図る。現在は人的な要素に大きく頼っているのでどの人手もが利用できる要支援学生のための学内外ネットワークを構築する。

2. 小、中、高等学校において収集したメンタルヘルス向上のための資料を分析し数多くの発表をしてきた。今年度はそれらをまとめて論文として発表したい。

#### (計画)

1. 「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する診断によらない支援研究」尺度の作成に関する研究論文はすでに査読段階に入っており、本年度の重点課題はいかにそれを実践に移せるかということである。昨年度も多くのネットワークと協働を行ってきたが、本年度は in 東海を中心に就労移行支援所、愛知県自閉症協会、他大学学生相談室などと連携を取り、より多くの若者就労支援と情報を交換し、学生支援を実施していきたい。

2. メンタルヘルス調査の質的分析結果を日本心理臨床学会（2019 年 5 月、横浜）において発表する。新しい研究も本年度 4 月より実施する予定である。

### ○2012 年 4 月から 2020 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

#### (著書)

- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆、谷村祐子、木野村嘉則「地域在住高齢者の心の健康支援」第 4 章 『地域創造研究所叢書、唯学書房、2017 年
- ・肥田幸子、堀篤実、松瀬留美子、鈴木美樹江、清水紀子、八木朋子、伊藤佐枝子、吉村朋子「発達障害の子どもをもつ親への支援から見えたもの」第 8 章 『子どもの心を支えるー今を生きる子どもたちの理解と支援』地域創造研究所叢書、唯学書房、2016 年、iv-vi、98-116

- ・宗貞秀紀、堀篤実、吉村譲、肥田幸子、宮本佳範、手嶋慎介、松村幸四郎「ドメスティックバイオレンスー女性への人権侵害がなぜなくなるかー」第4章 『人が人らしく生きるためにー人権について考えるー』 地域創造研究所叢書、唯学書房、2013年、63-75

(学術論文)

- ・鈴木美樹江、大塚敬子、肥田幸子、向井麻美子、廣浦美穂「小学生の学校不適応感がスクールカウンセラーへの関心に与える影響」『心理臨床学研究』Vol. 36、No. 6、2019年、635-645 査読有り
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「自閉症スペクトラム障害傾向を有する学生のための“見通し力”尺度作成の試み」『学生相談研究』、第37巻、1号、2016年、27-36 査読有り
- ・肥田幸子「自閉症スペクトラム傾向の子どもをもつ母親の心理的体験過程」『東邦学誌』第45巻、1号、2016年、49-59
- ・肥田幸子、丸岡利則、照屋翔大、正岡 元「大学への帰属感と意味づけが学校不適応に及ぼす影響」『東邦学誌』第45巻1号 2016年、61-71
- ・肥田幸子「発達障害傾向をもつ高校生の自己認知の特性」ー教師の理解との相違点を探るー『学校メンタルヘルス』Vol. 18-1、2015年、22-29 査読有り
- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆「地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査」『東邦学誌』第44巻、第2号、2015、147-161
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の進路選択行動に影響を与える要素」『東邦学誌』第41巻、第10号、2012年、147-161
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の就業意識形成のプロセスに関する研究」『東邦学誌』第40巻、第1号、2011年、153-168

(学会発表)

- ・鈴木美樹江、馬場ひとみ、大塚敬子、加藤大樹、谷口由香莉、肥田幸子「小学校におけるロールフルネスに関する研究(4)」ーロールフルネスと不適応徴候感がスクールカウンセラーへの関心に与える影響ー 2019 パシフィコ横浜、2017年度研究助成対象研究 日本臨床心理学会第38回秋期大会論文集 PB1-E p.199
- ・谷口由香莉、肥田幸子、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究(8)ー先生のイメージについて“SCへの関心”と“不適応傾向”の高さから見えたものー」2019 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第38回秋期大会論文集 PB1-01 p.203
- ・馬場ひとみ、谷口由香莉、鈴木美樹江、肥田幸子、大塚敬子、加藤大樹「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究(9)ー先生のイメージについて“ロールフルネス”と“不適応傾向”の高さから見えたものー」2019 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第38回秋期大会論文集 PB1-02 p.204
- ・加藤大樹、鈴木美樹江、馬場ひとみ、大塚敬子、谷口由香莉、肥田幸子「ロールフルネス発達モデルとメンタルヘルスの関連ー高校生を対象とした検討ー」2019 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第38回秋期大会論文集 PB1-03 p.203
- ・谷口由香莉、肥田幸子、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究(7)」2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-H
- ・馬場ひとみ、鈴木美樹江、大塚敬子、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究(1)」ー小学生版ロールフルネス尺度の因子構造の確認と信頼性の検討ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-E

- ・大塚敬子、鈴木美樹江、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究(2)」—学年差による検討— 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-F
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究(1)」—不適応要因とロールフルネスが不適応徴候に与える影響— 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-G
- ・肥田幸子、谷口由香莉、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究(6)」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-19
- ・谷口由香莉、肥田幸子、大塚敬子、馬場ひとみ、鈴木美樹江「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究(5)」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-18
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究(6)—3年間の縦断的研究による学年佐野比較検討—」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-20
- ・馬場ひとみ、鈴木美樹江、大塚敬子、肥田幸子、谷口由香莉「小学生における不適応プロセスの研究(7)—3年間の縦断的研究からみた学校不適応感と欠席日数との関係—」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-21
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究(8)—3年間の縦断的研究からみた学校不適応感が欠席日数に与える影響」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-22
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「ASD 傾向学生のための就業力尺度の作成(1)—項目の作成と信頼性の検討—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第58回総会論文集 PD87
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「ASD 傾向学生のための就業力尺度の作成(2)—尺度の再検査信頼性と妥当性の検証—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第58回総会論文集 PD88
- ・鈴木美樹江、肥田幸子、堀篤実「ASD 傾向学生のための就業力尺度の作成(3)—見通し力が就業力に及ぼす影響—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第58回総会論文集 PD89
- ・山内貴恵、肥田幸子、谷口由香莉、向井麻美子、鈴木美樹江「学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究(3)—学校不適応傾向とクラスの友だち及び通学班の関連—」 2016 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第35回秋期大会論文集 PB05-03
- ・鈴木美樹江、馬場ひとみ、肥田幸子、廣浦美穂、山脇麻由美、大塚敬子「学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究(4)—学校不適応傾向とスクールカウンセラー及び教師イメージとの関連—」 2016 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第35回秋期大会論文集 PB05-04
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「見通し力尺度作成の試み(1)—大学生を対象として— 2015 日本教育心理学会 第57回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会 第57回総会論文集 2015
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「見通し力尺度作成の試み(2)—尺度の信頼性と妥当性の検証— 2015 日本教育心理学会 第57回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会第57回総会論文集 2015
- ・鈴木美樹江、肥田幸子、堀篤実「見通し力尺度作成の試み(3)—AQ 下位尺度が見通し力に及ぼす影響— 2015 日本教育心理学会 第57回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会 第

57 回総会論文集 2015

- ・肥田幸子、鈴木美樹江、山内貴恵、廣浦美穂、大塚敬子、向井麻美子「小学生版「見通し力尺度」作成の予備研究」2015 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 634
- ・廣浦美穂、鈴木美樹江、大塚敬子、向井麻美子、山内貴恵、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（1）」—横断的調査による学年差・性差の検討— 2015 年 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 629
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、山内貴恵、廣浦美穂、向井麻美子、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（2）」—縦断的調査による学年差の検討— 2015 年 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 630
- ・向井麻美子、鈴木美樹江、大塚敬子、山内貴恵、廣浦美穂、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（3）」—縦断調査による不適応プロセス尺度間の関連— 2015 年 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 631
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、向井麻美子、廣浦美穂、山内貴恵、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（4）」—交差遅延モデルを用いた影響関係の検討— 2015 年 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 632
- ・山内貴恵、鈴木美樹江、肥田幸子、大塚敬子、向井麻美子、廣浦美穂「小学生における不適応プロセスの研究（5）」—学校不適応プロセスと不登校系呼応との関連— 2015 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 629
- ・鈴木美樹江、肥田幸子ほか「小学生版学校不適応プロセス尺度作成の試み(3)」日本臨床心理学会 第 33 回大会 パシフィコ横浜 2014 年 日本臨床心理学会 第 33 回大会論文集 2014 442
- ・HidaSachiko OkuboYoshimi SuzukiMikie「Perception Gap between Japanese Teachers and High-school Students on Developmental Disorder Tendency」The 35th International School Psychology Association Conference (ECP 2013) 17-20 July 2013 Porto Portugal
- ・鈴木美樹江、肥田幸子ほか「高校生の不適応徴候感が登校状況に与える影響過程」日本臨床心理学会 第 32 回大会 パシフィコ横浜 2013 年 日本臨床心理学会 第 32 回大会論文集 2013 470
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の進路選択行動を支える大学の支援」第 54 回教育心理学会総会 琉球大学 2012 年 11 月 日本教育心理学会発表論文集 2012 188

<学会分科会>

- ・肥田幸子 大学教育改革フォーラム 2018「発達障害及び発達障害傾向学生への支援の現状」発表者 2018 年 3 月 10 日
- ・肥田幸子 日本フェミニストカウンセリング学会第 10 回大会「発達障害と女性支援」コーディネーター 2013 年

(特許)

- ・なし

(その他)

- ・肥田幸子、丸岡利則、照屋翔大、正岡元「人間学部中途退学防止調査報告書」2015 年
- ・肥田幸子「発達障害と女性支援」『フェミニストカウンセリング研究』Vol. 11、2014 年、106-109
- ・肥田幸子他「学校と通級指導員に SC の果たせる役割」『学校臨床心理士活動報告書』2014 年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成 24 年度：科学研究費補助金（基盤研究 C）交付（代表者）

### ○所属学会

日本心理臨床学会、日本 EMDR 学会、

### ○自己評価

本年度は学会発表 4 点に留まった。ただ、1 点は心理臨床学会の研究助成対象研究に選ばれたものであり、その発表であった。小学生の心理支援の研究は、若い研究者たちと協力しつつ進めているものであり、2020 年度の心理臨床学会に発表予定である。

就労支援に関する論文は予定していた学術誌には掲載されなかったが、次年度には他の学会の学術論文として掲載予定である。

また、目標に掲げた「若者ハローワークや就労移行支援所等との連携を行いそれら学生の在学中の就労体験を行う」という点においては、学外とのネットワークが充実してきたといえる。若者ハローワークや就労移行支援所、名古屋市発達障害者支援センター（りんくす名古屋）、若者支援ネットワーク（SyNet）との連携のみならず、本年度は愛知自閉症協会とのネットワークも進み大いに情報交換をすることができた。

学内においては保健学生相談センターが未だ十分な機能を発揮できていない。専任の職員が配置され、よく機能を果たしてくれている。しかし、環境が整わず、支援の必要な学生の居場所になっていない。今後、彼らが安心して立ち寄れる居場所の整備が急務であり、学校側の支援を要望していきたい。

## III 大学運営

### ○目標・計画

#### （目標）

保健・学生相談委員会委員として責務を果たす。

保健・学生相談センターが本年度より立ち上がる。副センター長として、センターを機能的に運営し、合理的配慮を必要としている学生、心理的に拠り所を求めている学生、就職の困難が予測される学生などの集える場にしていきたい。

学生相談室の責任者として、高校も含めた学園全体の心理支援を行う。心理的に支援が必要な学生だけでなく、一般学生のメンタルヘルスを向上し、延いては中途退学予防に貢献する。研究課題でもある、大学生・高校生のメンタルヘルス予防システムの構築を図る。

#### （計画）

大学では新入学生に対して全員のメンタルヘルスチェックを実施する。この結果を分析し、個々の学生が示すメンタル的特徴をゼミ担当教員と話し合いたい。それによって一人でも中途退学、除籍の学生を減らしたい。

年々、心の問題をもつ学生は増えてきている。心理的不適応状態にある大学生のカウンセリングを引き続き行う。

高校においては、新 1 年生全員のメンタルヘルスチェックを実施し、クラスの担任にフィードバックする。1 年生の担任教員全員の面談を行う。本年度はメンタルヘルスチェックの要支援生徒に対して、全員の面談を実施予定である。

### ○学内委員等

学生・保健相談委員会委員、人間健康学部 SD ワーキング

### ○自己評価

保健学生相談委員会委員としての責務を果たした。保健学生相談委員会委員としては一委員としての役割のみならず、学生相談室責任者として要支援学生の報告、検討を行った。また、外部カウ

ンセラーと保健担当職員が連携し学生支援が進むように連絡調整を行った。

目標とした新入学時のメンタルヘルス調査を活用した中途退学防止と発達障害傾向学生の支援においては、所属学部の方々とは結果の提供、フィードバックができたが、他学部の先生たちとは話し合いのきっかけをつかむことができなかった。今後の課題といえる。

高校においては、昨年度より週1回（水曜日、13:30～、教頭・生活指導主事・養護教諭・カウンセラー）のチームミーティング（メンタルヘルス会議）が開かれることになり、毎回参加をしている。これによってよりきめ細やかな生徒対応ができるようになった。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### （目標）

発達障害傾向をもつ青少年の支援研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動を進める。発達障害に関しては中学、高校から現職教育の要請も多く、できる限り応えていきたい。DVに関する知識啓発のため活動をする。

###### （計画）

発達障害に関する講演依頼はすでに愛知自閉症協会から問い合わせが来ており、その他支援団体や高校・中学の現職教育も積極的に実施したい。DVに関する啓発に関しては名古屋市の社会講座において要請があれば実施する。

##### ○学会活動等

- ・日本教育相談学会尾張支部 研修会 「発達障がいの理解と対応」講師 2019.2.10

##### ○地域連携・社会貢献等

- ・愛知自閉症協会主催主催「診断によらない支援ースムーズな社会参加に向けてー」シンポジスト 2019.9.8
- ・名古屋市男女平等参画推進センター 2019年度第10回スーパービジョン 2019.11.27
- ・働くを考える 若者支援フォーラム 2019「診断にとられない支援を実現するために」 2019.2.23
- ・東邦高校 現職教育 「発達障がいの理解を深める」 2018.12.21
- ・名古屋市男女平等参画推進センター 2018年度第9回スーパービジョン 2018.12.19
- ・小牧工業高校 現職教育「発達障害の理解と対応」ー将来に向けての支援ー 2018.6.8

##### ○自己評価

障害者支援の活動は研究と平行してすでに9年目に入った。研究のメインは就労であるが、修学や中途退学の防止にも一役買っている。学外での活動も実施し、大学内でもSDとして人間健康学部の教員に対して講話を行った。現在、発達障害者支援は草の根的なところでも大きな動きを見せている。外部のネットワークを活用し、本学学生の支援を行った他、草の根的なグループにおいて啓発のための講演ができたのは評価できる。

DV被害女性対してのカウンセリング、電話相談、社会啓発活動のどの支援に関しては、これらを直接支援する名古屋市の女性問題相談員のスーパーヴィジョンを行い、カウンセリングの手伝いをしている。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽として、国家資格「公認心理師」の勉強会を主催した。



## VI 総括

授業に関しては、日常の講義やオープンキャンパス、高大連携授業もよい評価を得ているので、よりいっそうの工夫と開発を心がけたい。

研究活動においては、4点の学会発表でとどまってしまった。発達障害傾向の学生の就業支援の論文がなかなかよい発表媒体に恵まれず苦戦をしているが、2020年度にはジャーナル掲載が可能になると考えている。

発達障害及び発達障害傾向をもつ学生の就労支援の分野に関しては現在の活動が調査研究からネットワークを作る社会的な活動研究へと変化をしている。目標とするところは社会貢献であり、成果はいかに社会に対して個人の力を発揮し、社会とつながることで、孤立しがちな大学での研究を社会的に有益なものにしていくことができる。この研究は最初の調査、尺度作りから現在の行政・民間のネットワークへの協力と社会への啓発活動につながり、今後も成長発展が期待される。

保健・学生相談センターを開設することができたが、今後はこのシステムが有効に機能し、中途退学防止や発達障害傾向学生の就労支援にまで活用できるように整備していかなければならない。

学生相談室の責任者としては学生の心理的問題が重症化している印象を持っている。相談員間のコンサルテーションを怠らず、今後は定期的なケース会議も開いていきたい。

昨年度に心理関係の国家資格である「公認心理師」の取得した。本学では新しく「公認心理師」を取得するための科目が置かれるコースが新設されている。「公認心理師」の指定科目は多様で専門性も高い。定期的に同業者との勉強会を持ち、新しい要求に対応できるようにしていきたい。

4月に新入生全員にメンタルヘルスチェックを実施した。そのデータを中退防止や就労支援のために十分に生かし切れていないのは今後の課題といえる。高校では同様のメンタルヘルスチェックを実施してそれを各担任と共有し、後半の担任全員面接というシステムを実施している。大学においても前述のセンターを活かしつつ、学生支援のシステムを作っていきたい。

以 上